（絵：野口宣友）

南部町の民話4

鶴田の福米地蔵

その昔すげ沢谷下がりの鶴田と池野というちっちゃな集落に分かれ道があったげな。そこにな、祠もない野立ちのかわいい小さな「お地蔵さん」が祀ってあったげな。

ある年の暮れに鶴田村の吉兵衛さんが、注連縄を売りさばいた帰りに通りかかると地蔵さんは雪にスッポリ埋もれ、肩から頭まで雪をかぶって寒そうな姿で立っていた。これを見た吉兵衛さんは、かわいそうに思い、手を合わせるとドッコイショと背中にお地蔵さんを背負って家へ戻ってきた。雪を払って囲炉裏端でお地蔵さんを火にあたらせた。「寒かっただな。冷たかっただな。」まんまるい顔をした女房がやさしくお地蔵さんの濡れた体をふいてあげた。すると、あらっ不思議！なんと!!ほんわか、ほんわかと温かくなったお地蔵さんの二つの鼻の穴からポロリポロリと米粒が出るようになった。これには吉兵衛夫婦もびっくり驚いた。「こりゃあまあ、もったいないことだべ。粗末にしたらあかんぞ。」「んだ。んだ。」米粒の落ちるお地蔵さんの鼻の下にお碗を受けておくとやがていっぱいになった。そして、お地蔵さんの声が聞こえてきた。「この米は『福米』だからおまえさんにあげよう。拙僧はおかげでぬくもり、心から満足した。面倒だが元のところへつれてかえってくれ。」女房のつるさんはかわいい孫でも送り出すようにせっせとお礼に「赤い頭巾」と「赤いよだれかけ」をこしらえてお地蔵さんにかぶせた。かわいらしいお地蔵さんを吉兵衛さんは雪の降り止んだ中、元の場所まで送っていった。お地蔵さんがくれたお碗のお米は米びつに入れておいたが、なんと！飯を炊くのにすくっても、すくってもその翌日にはまたもとの量になってまったく減ることがない不思議なことがおこった。

そのうちこのことが村人に知れると欲深い権造は「ちぇっ！吉兵衛のやつめ。俺はそれ以上のことをしてやる。」と雪の降る日を待つこと五日。雪が降ったら、さぁ、お地蔵さんを家につれて帰ると、風呂に入れるわ、酒や肴、料理を供え、絹の座布団をこたつに敷いて寝かせた。そしてお地蔵さんの枕元には20ものお碗を並べた。コケコッコーと一番鳥が鳴くと「地蔵さん、何かいいものたくさん出したかな？フフフ」と覗いて見ると、どこへ行ったのかお地蔵さんの姿が見えません。その代わりにきれいな布団の上にたくさんの糞をしているではありませんか。権造はカンカンに怒ってその糞を布団にくるんでザンブと前の川に放り投げた。すると、そのとたん、糞は洗われて中からピカピカ光る小判があれよあれよという間に川底に沈んでいってしまった。権造はくやしくてたまらず女房と一緒に川底を探したが、とうとう小判は一枚もみつからんかったということじゃ。

おしまい。